冬の太陽

いまは一年中で日照時間が一番短い季節である。

短いとはいっても、平均的な出勤時刻には外はもう明るいし、お天気のいい日なら、ぽかぽか日向ぼっこもできる。冬なればこそ、太陽の存在はひとしお大きい。

フランスだとそうはいかない。空がやっと明るくなるのは朝の九頃、それが午後三時にはもう暗くなる。ランドセルを背負った小学生も暗いうちに家を出て、暗くなってから帰宅する。見ていると何やらすごく勤勉な感じでいじらしくなるけれども、別に日本の小学生と比べて長時間勉強しているわけではない。

日本では南向きの部屋は上等で、ゆえに日照権が大きな問題になる。目の前にビルが建って日が当たらなくなれば、家の資産価値も下がってしまうからだ。

しかしフランスにはそんな権利ははなから存在しない。郊外の一戸建てはおたがい離ればなれに建っているし、街なかの六階建てに住もうものなら、夏でも冬でも、今日が晴れか曇りか、窓から首を突き出して小さな四角い空を見上げなければ分からない。

それならフランス人は太陽を必要としないのかと言えば、もちろん動物だからそんなはずはなくて、ほんの少しの陽射しを求めて公園に日光浴に行く。

冬の太陽

私の乏しい経験でも、冬の終わり頃の太陽光線欠乏症はかなりきつかった。いつも喉が渇いているような感じで落ち着かない。始めは何が不足しているのか自分でも分からなかったが、ある時、太陽だ！と気がついた。

だから北欧の人間は、早春の復活祭の休暇には南へバカンス大移動をする。避暑でも避寒でもなく、太陽をむさぼりたいという差し迫った生理的欲求のためである。

フランソワーズ・サガンの小説『冷たい水の中の小さな太陽』は、エリュアールの詩から取ったしゃれた題名だが、これも日本人には分かるようで分からない。水の中に太陽が映っているのか、と考えがちだが、ほんとうは「冷たい水に射した微かな陽射し」と訳すべきなのだ。

自らの過ちでかけがえのない恋人に自殺された男が、彼女は冷たい水につかのま射し込んだ陽射しのようなものだったと呟くことばである。それがどんなに貴重で、はかないイメージか、日本の豊かな太陽からは想像もできない。フランスの子どもは太陽を黄色いパステルで描くそうだが、太陽の存在感はそれほど希薄なのだ。

それにひきかえアフリカでは、太陽は一番の嫌われ者だとか。これまた想像はできても実感しにくいことだったが、ポール・ボウルズの『シェルタリング・スカイ』という小説に、胸にこたえる強烈な表現があった。アラブ人の男に

冬の太陽

拉致され囚われた（と言っても嫌々でもないらしく、日毎ひたすら男の訪れを待っている）女主人公が、朝一番に部屋の窓に射し込む陽射しを、巨大な蛇の目玉のようだと感じる箇所である。蛇嫌いな私でなくとも、これはちょっと衝撃的ではないだろうか。

太陽は強いのも弱いのも、ありがたくない。布団も干せて日向ぼっこが幸せな日本に生まれて、ほんとうによかったと、この季節はことさらに思う。

初出＝北國新聞「北風抄」二〇〇六年十二月

ホームページ掲載＝二〇二二年十二月二三日